

テーマ:

# 元気な土でトマトを育てよう

福岡県宗像市立玄海東小学校  
2学年担任 松本 博文 先生  
栄養士 亀石 ひとみ 先生  
●小学校2年 ●生活科

## この活動の特徴

### 「凜々子」活用のポイント①

地域の有識者に学び  
堆肥づくりに挑戦！

### 「凜々子」活用のポイント②

残った苗を学校園に植えて  
収穫量を確保！  
調理の実践につなげる

### 「凜々子」活用のポイント③

「凜々子フォーラム」を  
フル活用！栽培のコツや  
簡単料理を即実践

## 活動のねらい



- 給食の食べ残しを使って、元気な堆肥をつくり、元気な土でトマトを育てる
- 育てたトマトを料理しておいしく食べる
- いのちの循環を感じ、食べ物を大切にしたいと思う心を育む

## 活動の概要と流れ

対象学年：2年生（25人）

実践期間：5月～7月

時期	学習活動
5月9日	・九州大学農学部の比良松先生を招き、初めに教員が堆肥の作り方を学ぶ。
5月11日	・各自アサガオの鉢に「凜々子」を植える。残った苗は、学校園に植える。
5月13日	・比良松先生を招いて、堆肥づくり開始。
5月14日～	・発酵熟成させるため、毎日、当番が交代で かき混ぜる（約3週間）。毎日自分の苗に 水やりをしながら、堆肥ができるのを待つ。
5月22日	・「凜々子フォーラム 九州会場」に栄養士が参加、栽培や調理のコツを学ぶ。
6月11日	・各自の鉢に牛乳パックを使って多くの土が入るように改良、 完熟した堆肥も入れる。
7月8日	・最後の観察を行い、鉢を家庭へ持ち帰る。
7月27日	・学校園にできたトマトを使って、 全校児童を対象とした『夏休みトマト親子 料理教室』を開催する。



## ここがポイント！ 取り組みの工夫

### 地域のつながりから始まった堆肥づくりと「凜々子」栽培

栄養士が研修で NPO 法人「ふくおか大地といのちの会」の存在を知り、その会員である九州大の比良松先生が学校近隣にお住まいだったご縁から、堆肥づくりのノウハウを一から教えていただけることになった。そんな時「凜々子」の苗が無料でもらえることを知り、作った堆肥で「凜々子」を育てることを計画した。

例年、2年生はミニトマトを栽培するため、2学年担任に堆肥づくりとトマト（凜々子）栽培の活動を提案、面白そうだということで、2年生での実践が決定した。

### ゼロからの堆肥づくりをプロに学び、本物体験を実践。

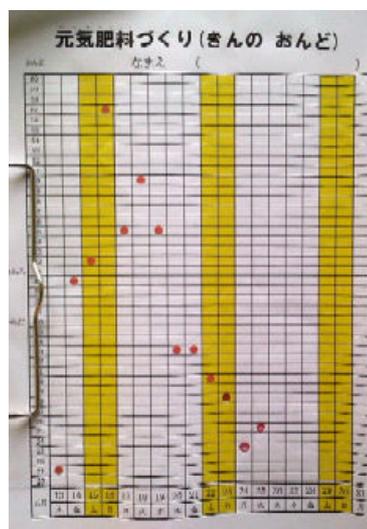
教師自身、堆肥づくりも「凜々子」の栽培も初体験であった。そこで、まずは、教員が堆肥づくりの基本を比良松先生に教えていただいた。

その後、生ゴミを使って堆肥を作る意義について、比良松先生から2年生にわかりやすくお話しして

いただいた上で、堆肥づくりを始めた。



堆肥を発酵熟成させるためには毎日かき混ぜて空気を入れる作業が必要。そこで当番を決めて交代でかき混ぜるとともに、発酵中の温度を測って記録することにした。2年生ではグラフは習わないので、点で記録するようにしたが、みんなで記録した表には、発酵による温度変化のようすがきちんと記録されていた。



### 「凜々子フォーラム」で得たコツを即実践！

堆肥づくり開始前、すでに「凜々子」の苗が届いていたので、まずは堆肥を入れずにアサガオの鉢に一人1本ずつ苗を植えた。その後、栄養士が「凜々子フォーラム」に参加。今のままでは土の量が足りないことや水やりのタイミングなどを知った。そこで、出来上がった堆肥を入れる際に牛乳パックを使って土の量が多く入るよう改良した。



夏休みには学校園で収穫したトマトを使って親子料理教室を開催、10組の親子が参加した。メニューは「凜々子フォーラム」で習った「りりごごはん」などの全メニュー。参加した児童からは、後日家庭でも作ってみたいという声も聞かれ、親子で食を見直すよい機会となった。

### 興味・関心を高めた取り組み

#### 生ゴミを使った堆肥の作り方

- ◆用意するもの  
竹パウダー、生ゴミ、ブルーシート、ダンボール、移植ゴテ
- ◆堆肥の作り方
  - ①生ゴミをブルーシートに移し、移植ゴテや手を使って細かくしていく（写真左）。最後に上にブルーシートをかぶせてみんなで足で踏み、つぶす（写真右）。
  - ②竹パウダーを入れて、よく混ぜ合わせる。
  - ③適量の水を入れて、よく混ぜ合わせる。
  - ④段ボール箱に入れて発酵熟成させる。毎日かき混ぜて空気を入れることで発酵が進み、環境条件にもよるが約3週間でサラサラの完熟堆肥が完成。



※詳しくは「大地といのちの会」ウェブサイトをご覧ください。

## 子どもたちの気付き、実践の成果

### 給食が堆肥になる姿を知り、食と命のつながりを実感。

給食の食べ残しを移植ゴテや手でちぎって小さくする作業は根気が要り大変だったが、最初は汚いと言っていた子どもたちも、途中からだんだんと慣れていき、竹パウダーを加える頃には素手で混ぜていた。



発酵熟成させるための毎日のかき混ぜ作業は、においがかなりきつかったが、当番は責任を持って混ぜ、温度を記録していた。

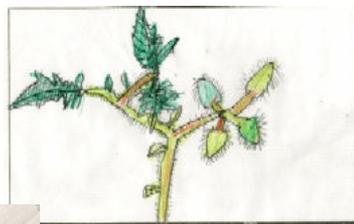


児童は発酵という言葉は知らないが、堆肥づくりを一から自分たちの手で作業し、その姿が変わっていくようすを目の前で見続けたことで、“生ゴミの堆肥が生きている”と実感したようだった。

### “かんさつ名人になろう”と連動した表現力の習得

一人一鉢で育てたことで、自分の苗の細かい変化をきちんとつかむことができた。国語科の“かんさつ名人になろう”では、「ざらざら」「ふかふか」などの言葉を使って表現することができた。

■「かんさつ名人」シートより  
「はっぱはざらざらしていききは白い毛がはえていて、つぼみのあるところに毛がぎっしりはえています。」



「かんさつ名人」シートより  
「はっぱはざらざらしていききは白い毛がはえていて、つぼみのあるところに毛がぎっしりはえています。」

### 自分で育てたトマトは格別！野菜嫌い克服のきっかけに

トマト嫌いの児童も多かったが、自分たちで育てたトマトは格別だったようで、トマト嫌いの子どもも、自分の鉢で収穫したトマトは食べることができた。

また、料理に挑戦した子どもは、ほかにもいろいろな料理を作りたいと、次の活動への意欲が高まった。

### 先生から一言！ 実践を通して

教師も初めての経験ばかりで手探りの実践となりました。失敗も多く、発酵中のダンボールを玄関に置いて臭いが広まったり、虫が湧いたり、また鉢栽培では土の量が少なすぎて、途中から追加したものの収穫量は少なく、実も小さくなってしまったり。課題も多く残りましたが、給食の食べ残しが堆肥に変わり、そこからトマトの命が育ち、そのトマトを食べたことで、子どもたちの命につながった、この命の循環は、子どもたちの記憶にしっかり刻まれたと思います。来年度はこの経験をいかして、さらに充実した学習にしたいと思っています。

### 受賞理由



給食残渣を使った堆肥作りの取り組みは、環境教育の一環として、多くの学校で取り組んでいるみたいだね。4年生以上で取り組むことの多い活動だけど、地域のプロの方の力を借りて直接指導してもらえば、2年生でもこんなにも充実した実践になるんだね！

「凜々子フォーラム」で紹介した、栽培のコツや簡単な実習メニューも、フル活用してもらえて嬉しかったな。初めての実践でも、まずは「やってみる！」その先生たちのパワーが、子どもたちを動かし、記憶に残る楽しい学びの場につながっていくんだと、改めて感じました。